

第4章（大学が使命・目的に基づいて独自に設定した基準による自己評価）

基準 A. 地域・社会貢献

A-1. 多摩学

（1）A-1 の自己判定

基準項目 A-1 を満たしている。

（2）A-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

①大学全体としての「多摩学」の取組みについて

多摩という名を冠した大学として「ローカリティー（地域性）」を大切に、多摩に関する地歴的特性を重視した研究を深め、本学が「多摩学」と呼ぶ教育・研究・地域貢献プログラムを一体的に開発しリードする地位を確立することを目指している。この場合の「多摩」とは、いわゆる「三多摩」地域という意味だけでなく、多摩川流域から相模川流域を挟んだ圏域を対象としている。

多摩川流域が近代史に果たしてきた役割は深く重い。幕末維新史における役割、自由民権運動史における役割、20 世紀都市開発における東京の先進的周縁地域としての役割など、多摩地域は常に時代の先端を走ってきた。本学は、その多摩をフィールドに「地域密着の研究・教育」を教員学生・地元団体の協働プロジェクトとして、多摩大総研と地域活性化マネジメントセンターを窓口に、インターゼミを含むゼミ活動を通じて活動をおこなってきた。

グローバリティーの追及と「多摩学」を通じたローカリティーの追求は両輪である。「グローバル」という問題意識を持ち「多摩学」をひとつのキーワードとして多摩川と相模川を挟む地域を広い意味での多摩と認識し、この地域に根ざす歴史的な資源を認識し、地域を革新するために大学と地域企業・人材・行政が連携しなくていけないという問題意識を基盤としている。

多摩大学が育成する人材は、多摩グローバル人材であり、多摩のローカリティーとグローバル世界とのつながりを意識できる人材である。「自分の地域社会および日本という国に対する深い理解と愛情がなければ、グローバル社会で活躍することはできない」という考えの下、大学のアイデンティティを再構築し高めるために立地する多摩地域への地域・社会貢献活動と学生・教員職活動を結びつけるプラットフォームとしての「多摩学」に関する多数の取組みを継続的に行っている。

②正課プログラムにおける多摩学の取組み内容について

- ・社会工学研究会（インターゼミ）「多摩学研究」

寺島実郎学長を主宰とし、教員 10 名、学生 30 名（両学部）、院生 5 名による全学横断の課題解決型ゼミである。平成 21 年 4 月に開講し、ゼミ開講初年度の多摩学研究では「多摩ニ

ュータウンの研究」を行った。平成 22 (2010) 年度は、八王子千人同心や絹の道、多摩の民話に読み取れる心性、多摩川の治水管理のように江戸時代から込められている多摩地域の DNA にまで学生の視界も深まってきており、ローカルにしっかり根ざしたうえで、グローバルな問題意識を活かした研究活動がおこなわれた。

社会工学研究会（インターゼミ）における多摩学に関するテーマ

平成 23 (2011) 年度テーマ：中里介山、白洲次郎

平成 22 (2010) 年度テーマ：八王子千人同心、絹織物産業、水防、民話

平成 21 (2009) 年度テーマ：多摩ニュータウンの再生

・現代世界解析講座（特別講座Ⅰ・Ⅱ）

寺島実郎監修リレー講座「現代世界解析講座」（授業科目名：特別講座）は、学生と地域住民 550 名（1 回あたり）を対象に、時代に発信する識者の生の声を聞く公開講座である。「世界潮流と日本の進路」を軸に、国際情勢、経済、国内行政、IT、歴史など各分野における精鋭の専門家を講師として招く、通年（春学期・秋学期）の体系的なプログラムである。平成 20 (2008) 年 4 月の開講後 4 年目を迎えている。地域研究をおこなう学生に対して現代世界が抱えている問題を理解させ、問題意識を広げて挑戦させることを目的としている。平成 23 (2011) 年度までのべ聴講者は 48,076 名、平成 23 (2011) 年度のべ聴講者は 11,078 名であった。

・学部教育における「多摩学」科目の設置

平成 23 (2011) 年度より 1 年生を対象に多摩地域について学ぶ「多摩学」科目を設置した。春学期は主に歴史の講義、秋学期は社会経済についての講義をおこなった。

③正課プログラム外の多摩学の取組みや研究内容について

・「多摩大鳥瞰図絵」制作の試み

多摩という地域はどこを指すのか。諸説あるが、多摩川流域から相模川流域を挟んだ圏域を対象とし、これを仮に「大多摩」とする。この地域は現在では、東西に中央自動車道、東名高速、中央線、京王線、小田急線、東海道新幹線などが通り、南北には多摩川と相模川が流れている歴史的にも興味深い地域である。いたるところに散在する万葉集の歌碑群、東国から九州の警護に行かされた防人が通った多摩よこやまの道、「いざ鎌倉」の鎌倉街道、横浜と八王子を結んだ文明開化の「絹の道」、新選組から自由民権運動への流れ、昭和の開発を彩った多摩ニュータウンなど。東京西部地区、23 区以外を指す東京都下という「辺境の多摩」ではなく、日本と世界の中心に多摩があると考え、東京は出稼ぎに行く場所と考えられる。空の羽田空港と海の横浜港から世界につながっている。沸騰する日本海の彼方に中国、韓国、北朝鮮、ロシアなどを擁するダイナミズムあふれるユーラシア大陸が視野に入る。少なく見積もっても人口 400 万人以上、12 万社以上の企業が存在するこの多摩を、地域性（ローカリティ）と世界性（グローバリズム）を具備する地域としてとらえ直す「多摩グローカリティ」という視点をわかりやすく示すために鳥瞰図絵の制作をおこなった。

・地域活性化マネジメントセンターによる取組み

平成 21 (2009) 年度に地域の問題解決を目的にした「地域活性化マネジメントセンター」を設立し、以下の活動をおこなった。

・プロジェクト型地域学習の実施

教員・学生が地元団体と協働し地域課題を解決するプロジェクトを、毎年 20 本近く実施し、地域開発教育としての効果を挙げている。

- ・平成 23 (2011) 年度 計 20 プロジェクト
- ・平成 22 (2010) 年度 計 17 プロジェクト
- ・平成 21 (2009) 年度 計 11 プロジェクト
- ・多摩学研究会の実施

平成 22 (2010) 年度より教職員による「多摩学研究会」を組織し、研究・発表を行い、平成 23 (2011) 年度は以下の研究・発表をおこなった。

- ・望月 照彦 「思想としての多摩 (近代～現代)『未来を生み出す、“知の共同体”多摩の構想』 —多摩リージョナリズムが、世界をリードする—」
- ・山本 紀子「NPO 活動からみた多摩・多摩ニュータウン」

多摩学研究会の成果として、平成 23 (2011) 年度紀要に以下 2 本の論文を掲載した。

諸橋正幸「古代・中世史から見た多摩地域の「独立」気風」

中庭光彦「多摩地域水道の都営一元化における広域化の意味」

また、多摩地域の有識者を外部講師として招聘し講演とディスカッションをおこなった。

講 師 一般社団法人首都圏産業活性化協会 (TAMA 協会) 事務局長岡崎英人氏

テーマ 多摩地域産業の現状と首都圏産業活性化協会の取り組み

講 師 農工大・多摩小金井ベンチャーポート

チーフインキュベーションマネージャー 大野裕深 氏

テーマ 産学連携活動の実例：多摩小金井ベンチャーポートのケース

・志企業研究会

多摩地域の独立気風あふれるベンチャー企業を「志企業」と名付け、これら企業が活躍できるビジネス環境研究を行っている。

研究成果は以下の通りである。

・多摩信用金庫・多摩大学地域活性化マネジメントセンター

『平成 22 (2010) 年度多摩地域の採用実態調査報告書』 平成 23 (2011) 年 6 月発行

『多摩地域の採用実態調査報告会』 平成 23 (2011) 年 7 月 8 日 (金) 開催 於：たましん事業支援センター (Win センター)

・特別調査プロジェクト

東日本大震災における救援・復旧過程における「道の駅」の果たした役割について教員・学生・職員による調査を下記の要領で実施した。

日 程：平成 23 (2011) 年 9 月 5 日 (月) ～10 日 (土)

調査対象：福島県、宮城県、岩手県の道の駅 28 カ所並びに遠野市役所等。

成 果： 報告書、多摩大学地域活性化マネジメントセンター

『多摩大学東北「道の駅」大震災研究プロジェクト～東北「道の駅」の震災対応の実態と新しい役割～』平成 24 (2012) 年 2 月制作。

報告会『東北「道の駅」の震災対応の実態と新しい役割』 平成 24 (2012) 年 2 月 14 日に仙台で開催。

- ・総合研究所による取り組み

- ・多摩の創業支援を行う「ビジネススクエア多摩」運営

平成 22 (2010) 年 10 月 26 日、多摩大学・多摩信用金庫・多摩市の三者により調印された「多摩市創業支援事業連携協定」を出発点に、平成 23 (2011) 年 4 月より多摩大学総合研究所が主体となってビジネススクエア多摩の運営を開始し、約 25 の企業と協働し、創業支援を行った。

- ・多摩信用金庫 Win プラザ多摩センターでの事業

事業者・支援機関・運営者 (Win プラザ多摩センター) が一体となって取り組み「新しいビジネス」の創造や事業者の課題解決を実現する Win プラザ多摩センターにおいて大学の人的資源を提供し、地域に発信した。

上記のとおり、正課プログラムとして、社会工学研究会 (インターゼミ) での「多摩学」研究、リレー講座 (特別講座)、ホームゼミ、プロジェクトゼミほか、授業科目など様々なプログラムが展開され、学生に地域研究の機会を提供し、調査研究成果を積上げている。正課外プログラムでは、地域活性化マネジメントセンター、多摩大総研を中心に企業との連携をおこない、学生の地域での活動を推進するとともに多摩信用金庫との連携による調査研究および教職員・学生による東北「道の駅」大震災研究プロジェクトの調査研究報告は評価できる。

(3) A-1 の改善・向上方策 (将来計画)

以下の事項につき、拡大・継続して実施する。

①社会工学研究会 (インターゼミ) : 多摩学研究グループを平成 24 (2012) 年度も継続実施する。

②地域プロジェクト : 平成 24 (2012) 年度以降も拡大・継続実施を行う。

③多摩学研究会 : 平成 24 (2012) 年度は

「多摩地域における災害時の流通システム回復性の研究」

「移動流通一買い物難民に対応した流通モビリティを支援する社会システムの研究」

「多摩における地域特性の研究－歴史的背景からの検証」

の 3 テーマに分かれ、共同研究を実施する。

また、3 年間の研究実績をセミナーを開催し発表することとする。

④志企業研究会 : 『平成 23 (2011) 年度多摩地域の採用実態調査報告書』を平成 24 (2012) 年 7 月予定。

平成 24 (2012) 年度研究も継続実施予定。

⑤東北「道の駅」プロジェクト : 研究成果を多摩学に応用し、研究に取り組む。

⑥多摩大総合研究所との連携によりさらに企業との連携を推進する。

本学の教育研究目的を達成することの一つとして、地元地域で評価されることが重要である。多摩という名を冠する大学に相応しく、「多摩学」を推進し多摩川と相模川流域には含まれた広い多摩を対象として歴史や企業研究等をおこないつつ、学生はフィールドワークとして地域で積極的に活動し、その成果を発表し提言を実現させる活動をおこない、教員、学生の地域連携活動や本学の教育研究成果を積極的に地域に発信することを継続していく。

A-2. 地域連携

(1) A-2 の自己判定

基準を満たしている。

(2) A-2 自己判定の理由

①教育育資源の地域社会への提供について

多摩キャンパスでは、図書館を多摩市、稲城市の住民を対象として毎週土曜日及び長期休業中の一般開放を実施するとともに、「多摩大学寺島実郎監修リレー講座」の一般受講者の利用も可能とし地域に開放している。また、大学施設を社会に広く開放し、年間を通じて有効に利用してもらおうという基本姿勢をとっており、平成 23 (2011) 年度も、テニスコートを日曜日に近隣の住民に開放し、教室については、TOEIC 検定試験会場、予備校・塾の模擬試験会場として貸出をおこなった。

平成 20 (2008) 年度より開講した「多摩大学寺島実郎監修リレー講座」は、平成 23 (2011) 年度に 4 年目を迎え、春学期・秋学期の各 12 回、年間 24 回の講座を各期 300 名の募集定員として一般公開し、常に定員を満たしている。一般参加者のリピーター率が約 80% であり、特に多摩地域の方には毎回出席される方も多く、非常に好評を得ている。

湘南キャンパスにおいても大学施設を開放し、社会に有効利用してもらおう基本姿勢をとっている。教室は英語検定試験会場、予備校・塾、金融財政市場研究会の試験会場などに貸出を行った。また、近隣の住民を学園祭に招くなどの交流も行った他、地元六会中学校の生徒のクラブ活動に体育館、テニスコートの貸出を行うなど、大学資源を社会に提供している。

また、以下の 5 つの点において地域連携に貢献し、人的資源を地域社会へ提供している。

・市民講座

大学・地元の双方の一層の発展を目指して藤沢市教育委員会との共催で毎年夏期に市民講座を開催、平成 23 (2011) 年度は、「中国の領土問題と文化財―日本との関係とは―」「多文化社会カナダ」「環境の安全とは何か」のテーマで 3 回開催し、延べ 174 名の受講者が参加した。

・神奈川県教育センターと連携した中高教員の研修

神奈川県教育センターとの連携協定による研修事業「県立学校新任校長研修講座」及び「中学校・高等学校英語授業づくり研修講座」を実施した。

・学生による関連サークル活動

・パトロールボランティア“たまパト”

藤沢北警察署からの要請により、平成 23 (2011) 年 6 月に発足したもので、地域防犯に大

学生の若いパワーを役立て、より良い地域作りを目指し活動している。大学生が主体となった防犯ボランティアは県内でも珍しく、湘南地域では初めての事例。88名のメンバーが登録しており、6月から11月にかけて計10回、交替で湘南台、六会、長後エリアのパトロールを実施した。

・英語教育ボランティア

平成22(2010)年度に引き続き、藤沢市教育委員会との連携で、藤沢市内公立小学校5・6年生のALT授業の補助として、学生によるボランティアを実施した。

- ・天神小学校：2日、9時間 8名のボランティア参加
- ・六会小学校：12日、43時間 17名のボランティア参加

・地域清掃美化ボランティア ECO 多摩

毎週2回、湘南台駅～SGS 校舎間等においてごみ拾い等の清掃活動を実施。また、江ノ島海岸等においても随時実施した。

・湘南藤沢コンソーシアム

藤沢市と藤沢市に立地する4大学は、それぞれの有する知的・人的資源を活かして地域貢献を前提とした連携、協働を進めることにより、市民力、地域力、行政力と自律した都市力の一層の強化による魅力溢れるまちづくりに資するため、「湘南藤沢コンソーシアム」を設立した。11月27日(日)には、藤沢市労働会館において、市民を対象に設立記念フォーラムを開催し、多摩大学は、ボランティア活動3団体について学生によるリレー形式でプレゼンテーションを行った。

<参加団体>

- ・小学校英語ボランティア「Let's speak English」
- ・学生防犯パトロール「たまパト」隊
- ・ECO多摩

・地域行事への参加

10月15日・16日に開催された湘南台まつりは、地域団体等が日頃の活動成果を発表する場として、また地域住民の交流の場として、地域連帯意識の高揚を図り、望ましい地域社会の形成、地域文化の発展に寄与することを目的に開催されているこのイベントに学生会・学園祭実行委員会・ECO多摩(サークル)が参加した。同様に藤沢市民まつり、遊行の盆、湘南台ファンタジア等の藤沢市のイベントに学生が企画運営に参加し、地域の振興・住民交流に寄与したほか、藤沢市タバコ対策協議委員として青少年への禁煙指導に協力するとともに、全日本花いっぱい藤沢大会実行委員として地域緑化推進に貢献した。また、藤沢市六会地区での地域活動として、学園都市むつあい協力者会議の月1回会合(情報交換会)、六陵祭(六会中学校学園祭)に学生が参加した。さらに、六会地区学校安全ネット

ワークに加盟し、年2回の会合や夜間パトロールへの参加を通じて地域学校間の連携推進に貢献した。

平成23（2011）年度は、地域活性化マネジメントセンターによる「東北『道の駅』大震災研究プロジェクトとして、2011年3月11日に起こった東日本大震災時に「道の駅」が果たした救援、復旧・復興支援機能の実態を明らかにするため、被災地の29の「道の駅」や地方自治体に行ったヒアリング調査と、139の全東北「道の駅」を対象としたアンケート調査を行い、報告書の作成と報告会を開催し、「道の駅」が今後果たしうる、平常時と災害時の双方に適応した地域の多機能型交流拠点としての役割を提案した。

総合研究所では、以下の地域貢献事業をおこなっている。

- ・シニアアルカディアプロジェクト
株式会社ジー・エフのシニアマーケティング事業の支援。
- ・川崎市男女共同参画センター協働事業
「女性のワークライフバランスの阻害要因に関する研究」
- ・生きがい健康事業の内部評価手法開発
- ・JR東日本若手社外セミナー

②大学と地域社会との協力関係が構築されているか

平成23（2011）年度においても、全学組織である地域活性化マネジメントセンターを中心に、多摩地域を主なフィールドとして多種多様な20の地域プロジェクトがゼミ活動をおこなった。特に、平成22（2010）年春に多摩大学の有志の学生により組織された多摩市の地域活性化を目指す団体「Tamauni」は、松本プロジェクトゼミとして活動をおこない、平成22（2010）年度にTamauniで作成したフォトモザイクが阿部裕行多摩市長と多摩市役所職員の目にとまり、平成23（2011）年の多摩市市制40周年記念事業のひとつとして多摩市との共同でハッピーフォトモザイクの製作をおこなった。

「Tamauni」を含む具体的な地域プロジェクトゼミの活動は、平成24（2012）年2月に「2011年度多摩大学地域プロジェクト発表祭」として多摩地域を主なフィールドとして展開したゼミによる多種多様な20の地域プロジェクトの発表祭として開催し、阿部裕行多摩市長を始め地域活動でご協力をいただいた方々を招いて、地域の方々にその成果を伝える機会となった。

- ・「2011年度多摩大学地域プロジェクト発表祭発表チームとテーマについて」
- また、地域活性化マネジメントセンターでは、志企業研究会として多摩地域採用実態調査を多摩信用金庫との連携よりおこない、平成23（2011）年7月に、たましん事業支援センターにて報告会を開催し、教職員共同の「多摩学研究会」では、教職員による研究成果の発表および多摩地域で活動する方を講師に招いての講演およびディスカッションをおこなった。

経営情報学部では、地域企業との提携教育プログラムとして、以下の授業をプロジェクトゼミナールにて開講した。

・「スポーツマーケティング実践講座」

サッカーJ2リーグの横浜FCと提携し、学生が横浜FCを実践活動の場としてサッカービジネスの研究・実践をおこなった。

・「多摩の地域ビジネス」

地元多摩地域のサンリオピューロランドと提携し、サンリオピューロランドの課題解決イベントの企画・運営をおこなった。

グローバルスタディーズ学部では、「藤沢市と多摩大学との連携等協力協定」により藤沢市、藤沢市教育委員会、周辺大学との連携により、協力関係が構築され連携の実績を積上げている。

経営情報学研究科では、平成23（2011）年度に多摩地域の社会人を対象としたMBA取得の機会として、八王子サテライトを開講した。

多摩大学総合研究所では、多摩市創業支援施設「ビジネススクエア多摩」と大学の連携として入居している創業者との交流、大学イベントへの入居者の参加、ビジネススクエア多摩のイベントに教職員や学生が参加しながら、連携を深めていった。

また、立川まち回遊イベントや齋藤T. 裕美ゼミによる立川商工会議所と連携したイベントプロジェクトを支援し、地域と大学をつなぐ役割を担うとともに、地域連携の推進をおこなった。

(3) A-2 の改善・向上方策（将来計画）

経営情報学部においては、

・地域プロジェクト：プロジェクトの質と量の拡充をはかる。

・多摩学研究会：多摩学の研究ラインの拡充し、複数教員による実学的な学術研究に取り組む。

・志企業研究会：多摩信用金庫との協働により引き続き新しいテーマに取り組み、調査研究をおこなう。

・東北「道の駅」プロジェクト：研究成果を多摩学などに応用して、引き続き研究に取り組む。

・多摩大総合研究所との連携により「ビジネススクエア多摩」の活動との連携をおこなう。

グローバルスタディーズ学部においては、「藤沢市と多摩大学との連携等協力協定」により、

着実に深まっている連携を引き続き継続する。

本学の地域社会との連携は、教員、ゼミ活動、学生ボランティア活動、総合研究所の活動等、小規模大学としては、密接な関係が築かれていると言える。「地域活性化マネジメントセンター」における地域への協力窓口を統一するなど、活動の情報共有と活動の相乗効果を生みだせるようになり、企業との関係も研究所を中心に連携が図られている。

今後、広域多摩地域の他大学との関係を強化していき、さらに、活動を多摩地域だけではなく広域多摩地域にフィールドを拡大していくことを目指す。地域貢献としては、本学の特徴が凝縮された寺島実郎学長監修の「リレー講座」を公開講座の中心に据え、講座の強化をはかりながら引き続き地域に寄与していくものとする。

【基準 A の自己評価】

多摩という名を冠した大学として、「ローカリティー（地域性）」を大切に、多摩に関する地歴的アプローチに基づく研究を深めながら、地域に根ざすことを最重視している。

また、多摩グローバル人材を育成するべく、グローバリティーはローカリティーとの関係の中でこそ意味を持ち、多摩という地域性を深化させる中で「世界とのつながり」を持つものである。そのためには、単に地域活性化をおこなうということのみならず、グローバリティーの追及と足元をみつめる「多摩学」を通じたローカリティーの追求は両輪であり、本学のアイデンティティを高めるためにも不可欠である。

本学の地域・社会貢献については、以下の事項を中心に着実に成果を積み重ねているものと評価できる。

(1) 地域活性化マネジメントセンター

全学組織である「地域活性化マネジメントセンター」は、地域の問題・課題を診断し、その解決を図り、地域の持続的発展に寄与する人材育成と、地域連携・地域貢献を目的とし、地域連携の情報が集約されている。

(2) 「地域プロジェクト発表祭」の開催

「プロジェクト型地域学習」をしておこなわれている多種多様なプログラムの成果報告会を平成 21（2009）年度より毎年開催している。年を追うごとに地域住民の方や行政、企業の方との関係も密接となり、地域貢献活動としても深化している。

(3) 「多摩学」の研究

多摩学研究会における教職員協同の研究、インターゼミ（社会工学研究会）における共同研究の継続、正課授業における「多摩学」科目の設置など、教職員・学生の参画による幅広い教育・研究活動が展開されている。

(4) 「寺島実郎監修リレー講座」

各界の碩学を講師として迎え、リレー講座として日本と世界の置かれた歴史的位相を多面的な視点から再検討し、その今日的課題を解決するプログラムを構築する講座。半期 12 回、年間 24 回の講座として開講。各期 300 名を地域の方に開放し、大学の公開講座として地域に貢献する講座である。

(5) 東北「道の駅」大震災研究プロジェクト

社会科学系の大学として、常に時代と併走していくことが重要であり、東日本大震災に向き合いながら、調査研究をおこなうことは必須である。そこから派生するものは多摩学研究などに深化させ、継続させていくものとする。

(6) 総合研究所との連携

これまで、地域に根ざして活動を続けてきた総合研究所の活動と地域活性化センターの活

動を連携させることで相乗効果を生み出し、大学としての地域貢献活動を充実したものにしている。

(7) 多摩大学、多摩市、多摩信用金庫の3者連携

平成 22 (2010) 年 10 月に多摩大学・多摩市・多摩信用金庫の三者による「多摩市創業支援事業連携協定」締結された。

この締結により、創業支援事業のみならず様々な連携・プロジェクトがおこなわれることとなり成果をあげている。